

# ライオンの食卓

——Ernest Hemingway の “The Good Lion” における「食」——

勝 井 慧

**Synopsis:** Ernest Hemingway’s “The Good Lion,” which is written in 1951 as one of the “two fables about two very complicated and brave animals by a very complicated and brave American writer” has long been regarded as a simple fable for children. “Foods” and “drinks” in this short story, however, have significant allusion which discloses a conflict between the protagonist’s appearance and inner desires. The purpose of this paper is to declare the “complicated” mental and physical condition of the “good” lion by examining the representations of “foods” and “drinks” in this work.

## 1. ヘミングウェイにおける「食」

「君がどんなものを食べているか言ってみたまえ。君がどんな人間であるかを言い当ててみせよう」(サヴァラン 21)。フランスの法律家、政治家、そして著名な美食家である Brillat-Savarin のこの有名な言葉は、Ernest Hemingway の多くの主人公たちに当てはめることができる。Linda Underhill と Janne Nakjavani は、Hemingway 作品の主人公たちが異国の文化をその土地の食事を通じてより深く経験しようとする傾向があるとして、以下のように述べている。

By eating the foods the natives eat, often even sharing the same bowl, bottle, or plate with them, the expatriate heroes take sustenance to strengthen themselves for an adventure in foreign land and absorb the native culture through the food, taking part in the culture so as to experience the adventure truly, as a native world. (Underhill and Nakjavani 87)

例えば *The Sun Also Rises* の主人公 **Jake Barnes** はパリでシャンパンや子豚料理をはじめ、さまざまなフランス料理を堪能し、スペインではバスク人と共に革袋からワインを飲み、さらに闘牛を観戦するパンプローナでも地元の人々と食事や酒を分け合っている。*A Farewell to Arms* の主人公 **Frederic Henry** は第一次世界大戦の戦場でイタリア人兵士たちとスパゲッティを分け合い、*For Whom the Bell Tolls* の主人公 **Robert Jordan** はスペイン市民戦争において、スペイン人のゲリラ部隊とウサギのシチューを共に食する。このような地元の人々と現地の食事を分け合う場面は、異文化に対する主人公たちの共感と理解を暗示する役割を果たしているといえる。

しかしその一方で、「食」は登場人物の暗部を照らし出す役割も担っている。**Hemingway** の短編小説 “The Good Lion” は、**Hemingway** 作品の中でも「食」と登場人物の秘められた側面を特に顕著に示すものであるといえる。“The Good Lion” は子供向けの寓話として、もう一つの寓話 “The Faithful Bull” と共に、“very complicated fables by a very complicated . . . American writer Ernest Hemingway” (*Holiday* 50–51) という見出しのもと、雑誌 *Holiday* において 1951 年に発表された。

これらの寓話は **Hemingway** の有名な短編作品と共に *The Complete Short Stories of Ernest Hemingway* に収録されているにもかかわらず、研究者の間での位置づけは低く、文学批評の対象となることはごく稀である。**Paul Smith** は “The Good Lion” と “The Faithful Bull” はわずかに伝記的な重要性はあるものの、物語として研究する根拠はほとんどないと述べている (**Smith** 395)。**Kenneth G. Johnston** はライオンと雄牛について次のように批判している。“... thinly disguised, flattering self-portraits, tales of self-justification, probably intended to disarm, forestall and, or, anticipate domestic and literary criticism. In fact, they may be read as fables for critics, past, present, and future” (**Johnston** 149). **Johnston** の意見が示しているように、“The Good Lion” と “The Faithful Bull” は寓話という形式ゆえに軽視されてきたと考えることができる。

確かに “The Good Lion” は **Hemingway** が懇意にしていた若いイタリ

ア人女性 Adriana Ivancich の幼い甥 Gherardo Scapinelli に捧げられた作品であり、Adriana によって絵本風のイラストが添えられて雑誌に掲載されている<sup>1</sup>。しかしながら作品が掲載された *Holiday* 誌が、上等なウィスキーや自動車などの広告を多く掲載した、裕福な男性用の旅行雑誌であることを忘れてはならない<sup>2</sup>。“The Good Lion”にはさまざまなカクテルや異国の料理が登場するが、それは幼い子供ではなく、上質な酒や異国情緒を求める *Holiday* 誌の読者の嗜好にこそ適ったものであるといえよう。すなわち、一見子供向けの寓話として描かれているものの、実際のところ “The Good Lion” は Hemingway の他の短編小説同様、大人の読者に向けて書かれた作品であり、わずかに表面に現れた氷山の一角の下に、より大きな物語と意味が秘められていると考えることができる。

“The Good Lion”に描かれた「食」は、特に主人公の外面と内なる欲望との間の葛藤を示唆する重要な役割を担っている。本作に描かれた「食」をより詳細に考察するならば、長らく文学的に軽視されてきた本作が単なる子供向けの寓話でも、“flattering self-portrait”でもなく、*Holiday* 誌掲載時に作品の見出しに書かれた表現を借りるならば、「とても複雑な」作品であることが明らかになるだろう。

## 2. 「食べ物」が語る物

本作は “The Good Lion”と題されているが、そもそもなぜ主人公のライオンは「良い」と呼ばれるのだろうか。まず始めに、「食」の描写を通じてライオンの「善良」さを定義したい。物語は以下のような描写で幕を開ける。“Once upon a time there was a lion that lived in Africa with all the other lions. The other lions were all bad lions and every day they ate zebras and wildebeests and every kind of antelope. Sometimes the bad lions ate people too” (CSS 482). この冒頭の場面ではアフリカのライオンたちが野生動物や人間を食べるため「悪いライオン」と表現されている。一方で、主人公のライオンは背中に翼があること、そしてパスタやスキャンピ

と呼ばれるエビ料理ばかり食べるため他のライオンから馬鹿にされるが、彼が動物ではなくパスタを食べる理由は“**he only ate pasta and scampi because he was so good**” (CSS 482) と説明されている。獣や人間を食べるライオンは「悪い」ライオンであり、食べないライオンは「良い」ライオンであるというこの単純な二項対立は、本作を子供向けの寓話と見なすならば、いたって自然であるといえる。しかしながら、見逃してはならないのはライオンたちの善悪の根拠として書かれている事柄が、彼らの「食」の嗜好が西洋的か非西洋的かに基づいている点である。パスタ同様、スキャンピも代表的なイタリア料理であり、そのような西洋的食文化を好む者は、西洋的文化、道徳にも適合すると見なされるからこそ、主人公のライオンは「良い」ライオンとして位置づけられ、逆に獣や人間を食べるライオンたちは西洋的文化や道徳に反する「悪い」ライオンとして描かれるのである。

冒頭の段階では、「良い」ライオンのイタリア料好きは、彼が西洋文明に根差した文化や価値観を持つ、西洋的視点から見て「良い」存在であることを示すのみであるように思われる。しかし、冒頭でライオンの善良さを示した「食」の好みは、やがて彼の暗部を暴くものとなる。

物語の序盤において、「良い」ライオンは他のライオンたちのようにマサイ族の牛を食べるのを拒み、“**some tagliatelli**” と “**a glass of pomodoro**” (CSS 482) を所望する。“**tagliatelli**” とはイタリアの平たく細いひも状のパスタであり、“**pomodoro**” はイタリア語で「トマト」を意味するため、グラス一杯のトマトジュースを求めたということである。この西洋料理、特にイタリア料理に対するこだわりが「良い」ライオンと他のライオンたちの間に決定的な亀裂を生じさせる引き金となる。雌ライオンは“**who are you that you think you are so much better than we are? Where do you come from, you pasta-eating lion? What are you doing here anyway?**” (CSS 482) と言って「良い」ライオンをののしる。アフリカのライオンのように動物を食することを拒み、イタリア料理を偏愛する「良い」ライオンの食の好みは、単なる嗜好の問題ではなく、ライオンの習慣よりも人間の文化を、ひいてはアフリカよりもイタリアなどの西洋文化を重んじる高慢さの証とし

て、雌ライオンの口を通じて描かれる。

実際、この雌ライオンに対し、「良い」ライオンはこれまでの上品な立ち居振る舞いとは打って変わった傲慢さで、自分の父親はヴェニス王であり、サン・マルコ広場の鳩やブロンズの馬の彫像は父を恐れ従う臣下であると述べ、さらに “There are more palaces in my father’s city than in all of Africa” (CSS 428) と続ける。ヴェニスという一つの町が、アフリカ全土よりも多くの宮殿を持っているというこの言葉は、明らかにイタリアの文化の優位性を誇示し、アフリカの文化を貶め、卑小化するものである。「良い」ライオンの言葉に怒ったライオンたちの牙から逃れるため、背中の翼で空に舞い上がると、「良い」ライオンはその高慢さをさらに露呈する。他のライオンたちを見下ろし、「良い」ライオンは “What savages these lions are” (CSS 483) と考え、他のライオンたちが “African lion dialect” (CSS 483) で吼えるのに対し、自身は “a lion of culture” (CSS 483) であるとして流暢なスペイン語とフランス語で彼らに別れを告げる。このように、「良い」ライオンのイタリア料理へのこだわりは、一見すれば彼の西洋的価値観に基づく「善良」さという道徳性を示すように見て取れるが、その一方で、このイタリア料理への固執が、雌ライオンの言葉が示す通り、彼が自分を他のライオンよりも優れた存在であると考え、ヨーロッパの言語を話すことを “culture” の証として尊び、アフリカのライオンの言葉を “dialect” を吼える者として蔑む差別的な側面を持つことを浮かび上がらせる契機となるのである。

Jake Barns や Frederic Henry, Robert Jordan のような積極的に異国の言語、文化、食生活を吸収しようとする Hemingway 作品の代表的な主人公たちと比べると、アフリカのライオンの食生活や言語を蔑み拒否する「良い」ライオンは異質な主人公のように思われるかもしれない。しかしながら、アフリカを舞台とした Hemingway 作品における主人公たちと比較するならば、ライオンの西洋文化への固執も決して例外的とはいえない。例えば、Hemingway の短編作品の中でもとりわけ評価の高い “The Snow of Kilimanjaro” の主人公 Harry は、サバンナに滞在しながら “whisky-

soda” (CSS 40) を飲み、妻はトムソンガゼルを射止めると “He [Molo]’ll make you good broth and I’ll have them mash some potatoes with the Klim” (CSS 46) と言って夕食の献立を指示する。“Broth” とは肉や野菜を煮て作る澄んだコンソメ風スープであり、マッシュポテトに混ぜられた “Klim” とは 1920 年代にアメリカの家庭で一般的であった Merrell-Soule Company 製の粉ミルクの商品名である。すなわち、アフリカの野生のトムソンガゼルが材料であっても、調理法はあくまで西洋的なものである。現地の食生活を受け入れ、土地の人々と料理を分け合うことが主人公たちの異文化への共感と理解を示唆するのであれば、アフリカにしながら西欧風の食生活を保持しようとする Harry 夫妻の態度は、アフリカ文化を吸収するのではなく、あくまで西洋文化を固持しようとする意識の現れであるといえよう。

“The Snow of Kilimanjaro” と並んで評価の高い “The Short Happy Life of Francis Macomber” では、主人公 Francis Macomber はサバンナでの狩りの後、妻と狩猟ガイドの Robert Wilson に対し、“lime juice or lemon squash” (CSS 5) を飲むかと尋ね、最終的には全員で “a gimlet” (CSS 5) を飲むこととなる。サバンナの真ん中でアメリカやヨーロッパにいるかのようにウィスキーやギムレットを飲む様子は、前述の “The Snow of Kilimanjaro” の場合と同様であるが、食事においても Macomber たちは Harry 夫妻と同じく西洋流を貫く。獲物の羚羊を食べる場面では、“[Macomber is] cutting the eland steak and putting some mashed potato, and carrot on the down-turned fork that tined through the piece of meat” (CSS 10) とあるように、アメリカのビーフステーキと同様、羚羊をステーキとして焼き、マッシュポテトやニンジンの付け合わせと共に食している。

Hemingway の自伝的アフリカ旅行記 *Green Hills of Africa* においても、語り手たちは西洋流の食生活を変えることはない。語り手たちはトムソンガゼルを食す際、“the fresh butter . . . Grant’s gazelle chops, mashed potatoes, green corn, and then mixed fruit for dessert” (GHOA 28) と

いうように、慣れ親しんだ西洋風の調理法を選択し、デザートとして “a special dish of Viennese dessert” (*GHOA* 27) まで楽しんでいる。*Green Hills of Africa* においてもっとも注目すべき食事風景は、語り手がマサイ族と出会う以下の場面であろう。この場面で語り手はマサイ族の食事を共に分け合うのではなく、自分たちが持ってきた缶詰やパンをマサイ族に分け与えている。

Then I had M'Cola open the two cans of mince meat and the plum pudding and I cut these into rations and passed them out. I had heard and read that the Masai subsisted only on the blood of their cattle mixed with milk, drawing the blood off from a wound in a vein of the neck made by shooting an arrow at close range. These Masai, however, ate bread, cold mince meat and plum pudding with great relish and much laughter and joking. (*GHOA* 201–202)

表面的には語り手はパンや缶詰も抵抗なく喜んで食べるマサイ族を描くことで、家畜の血と乳を混ぜたものだけを食べているという偏見を覆しているように思われる。しかし、マサイ族が実際どのような食生活をしているのかが語られることはなく、語り手がマサイ族の食事を口にしている場面も描かれない。異国の食を共有することが異なる文化の吸収を意味するのであれば、語り手の行動はマサイ族の文化を自らの内に取り入れるのではなく、パンや缶詰といった近代的、西洋の食事を分け与えることで、マサイ族を近代西洋の文化に同化させようとするものであると言えよう。

これら 1930 年代に執筆されたアフリカを舞台とする三作品において、西洋風の食事を固持し、アフリカの現地の食事を避ける主人公たちの行動は、知的で洗練された趣味を持つ西洋人が示す当然の行動として比較的無批判に描かれているように思われる。しかしながら、これらの作品から約 16 年後に執筆された “The Good Lion” において、「良い」ライオンが示す西洋料理に対する固執とアフリカのライオンたちの食習慣への嫌悪は、「良い」ラ

イオンが抱く西欧文化優位の傲慢さとアフリカの文化を貶める差別的な側面を暴き出す意図を持って描かれている。

Jayne Widmayer は「良い」ライオンを “a hypocritical griffon” (Widmayer 433) と呼び、雌ライオンについて、“This wickedest lioness . . . represents everything a lion really is. Blood is caked on her whiskers and her breath smells bad ‘because she never brushed her teeth before’” (Widmayer 434) と述べている。すなわち、アフリカのライオンにとって動物や人間を食べることは自然であり、ライオンがひげのまわりに血をこびりつかせて獲物の血を飲むことは、*The Sun Also Rises* においてスペイン人が革袋からワインを飲むことと同等の行為であると言えよう。Widmayer は “The Good Lion” と “The Faithful Bull” の二つの作品は、単なる自己弁護的な寓話ではなく、“satiric attacks on pretensions and affectations” (Widmayer 433) であり、同時に “Hemingway’s own parody of Ernest Hemingway” (Widmayer 433) であるとも述べている。

Hemingway は自身と主人公の間にしばしば共通点を持たせるが、本作においても「良い」ライオンが Hemingway 自身と Hemingway の生み出した主人公たちを投影した「パロディ」であることは明白である。実際、Hemingway は 1920 年代にはパリに住み、しばしば闘牛観戦のためスペインを訪れていたため、「良い」ライオンと同様にフランス語とスペイン語に堪能であった。パリやスペインの文化と言語に通じているという要素は、*The Sun Also Rises* でフランス語とスペイン語を流暢に話す Jake をはじめ、多くの Hemingway 作品の主人公に共通している。また、Hemingway は 1933 年にはアフリカを旅行し、「良い」ライオンのようにサファリを楽しんでいる。次項でより詳しく考察するが、物語の後半で「良い」ライオンはゴードン・ジンで作ったドライ・マティーニを飲んでおり、それは Hemingway のトレードマークとも言えるお気に入りのカクテルの一つである (Boreth 189–90)。このように、「良い」ライオンは作者 Hemingway と、その面影を宿した他の多くの主人公たちを反映した鏡のような存在であるといえるが、それが映し出すものは、Hemingway とその主人公たちが洗



練された旅行者という装いの下に秘めていた西欧文化優位の傲慢さと、アフリカの文化を「野蛮」と見なし忌避する無意識の姿勢である。

### 3. 秘めたる渇き

「飲み物」もまた、「食事」と同様に「良い」ライオンの隠された欲望を暴く重要な機能を持っている。アフリカのライオンたちとの諍いによって故郷のヴェニスに帰った「良い」ライオンは、バーに立ち寄るとアフリカでは決して人間を食べようとしなかったにもかかわらず、バーの店主に “Hindu trader sandwiches” (CSS 483) はないかと尋ねる。バーテンダーが “No, but I can get some” (CSS 483) と答えると、ライオンは “While you are sending for them, make me a very dry martini . . . with Gordon’s gin” (CSS 483) と返答する。そして、ライオンは周りの人々を見回し, “he knew that he was at home but that he had also traveled. He was very happy” (CSS 484) と考え、物語は幕を閉じる。この場面では、ライオンが注文する “Hindu trader sandwiches” は生々しい人食いライオンの食事としてではなく、バーテンダーが動揺することなしに “I can get some” と言って用意できる、エキゾチックな料理の一つとして描かれている。Widmayer はライオンが “Hindu trader sandwiches” を注文し, “the enlightening advantages of travel” (Widmayer 434) を周囲の客たちに見せつけることで、経験豊富な旅行者としての虚栄心を満たし、「とても幸せ」になっていると指摘している。

しかしながら、アフリカへの旅は本当にライオンの嗜好を変化させたのだろうか。この点を見極めるため、ライオンが示す「飲み物」への好みを詳しく考察して行きたい。アフリカ滞在中、ライオンは次のように飲み物を頼んでいる。“[He] ask politely if he might have a Negroni or an Americano and he always drank that instead of the blood of the Hindu traders.” (CSS 482) ここで「良い」ライオンが所望している “Negroni” とはジンとベルモット、カンパリで作るカクテルであり、イタリア人の Negroni 伯

爵に由来して名づけられたものである（澤井 107）。“Americano” もまたカンパリ、スイートベルモット、ソーダから作られるカクテルであり、1860年代にイタリアで“Milano-Torino”の名で生まれたが、アメリカ人の旅行者がこのカクテルを好んだことで1900年代には“Americano”と呼ばれるようになる（澤井 149）。

このようなイタリア生まれのカクテルを好む「良い」ライオンは、イタリアの文化に馴染んだ洗練された旅行者であることを読者に印象付ける。しかし、これらのカクテルは彼の秘められた欲望の存在を示唆する、重要な役割を担っている。まず注目したいのはカクテルの名前である。“Negroni”と“Americano”というカクテル名は明らかに人間の“Negro”と“American”を彷彿とさせる。さらに、この二つのカクテルはカンパリによる深い赤色を特徴としているが、それは赤い血の色を思わせる。すなわち、他の「野蛮な」ライオンたちのようにヒンドゥー教徒の血を飲む代わりに、西欧文化に親しんだ「文化的」なライオンであることを示すはずのカクテルが、皮肉にもその名前と色によって、「良い」ライオンが実のところ「黒人」と「アメリカ人」の血を飲みたがっている、という印象を読者に与えるのである。

さらに、前述したように「良い」ライオンはマサイ族の牛を食べるのを拒み、タリアテッリというパスタと“a glass of pomodoro”（CSS 482）、すなわちトマトジュースを好んで食したことで他のライオンたちと決別してしまう。表面的にはトマトジュースを飲むことには、「良い」ライオンが血や肉ではなく野菜を好む、安全で「良い」存在であることを示す効果があると思われるが、トマトジュースの赤い色は“Negroni”や“Americano”の赤い色と同様、血の色を想起させるものでもある。「良い」ライオンは人間や動物の血や肉を口にするのを拒み、西洋の文化と道徳に沿った「善良さ」を身に着けていることを、イタリア生まれのカクテルやトマトジュースのような植物由来の「飲み物」によって示すが、その「飲み物」の名前と色が、西洋の道徳観から見れば「悪い」とされる、人間の血への渴望が「良い」ライオンの内に潜んでいる可能性を示唆するのである。

「良い」ライオンだけでなく、Hemingway 作品の多くの主人公たちはしばしば、伝統的な西洋の社会規範から逸脱した行為に惹かれつつ、それを抑圧し葛藤する。例えば *A Farewell to Arms* の主人公 **Frederic Henry** と恋人の **Catherine Barkley** は、当時のアメリカでは不道德とされる婚前交渉を行い、喜びを感じる一方で、神から下される罰におびえ、婚前交渉の結果身ごもった子供を出産したために **Catherine** が死ぬ場面では、その死を不道德に対する罰と捉える。また、*The Sun Also Rises* の主人公 **Jake Barnes** と親友の **Bill Gordon**、および *A Farewell to Arms* の **Frederic** と軍医 **Rinaldi** との間には同性愛的な愛情がほのめかされるが、キリスト教の規範に反するその欲望を、主人公たちは友情や仕事という建前によって隠蔽する<sup>3</sup>。

すなわち、一見子供向けの寓話のように思われる “The Good Lion” においても、「良い」ライオンは Hemingway 作品の他の主人公たち同様、西欧文化に根差した洗練された趣味と「善良」さの裏に、西洋的価値観からは「悪」と見なされる欲望を秘めているのである。「飲み物」はライオンに西洋的「善良」さの装いを付与すると同時に、ライオンが抱く「悪」と呼ばれる行為への秘めたる渴きを示唆する、重要かつ「複雑な」機能を持っているのである。

#### 4. 野生の仮面

最後に、「良い」ライオンがヴェニスハリーズ・バーで注文する料理が持つ意味について論じたい。「良い」ライオンはヴェニスに帰ると、サン・マルコ広場に立つ翼あるライオンの彫像である父親を訪ね、次のような会話を交わす。

... the horses still had their feet up and the Basilica looked more beautiful than a soap bubble. The Campanile was in place and the pigeons were going to their nests for the evening.

“How was Africa?” his father said.

“Very savage, father,” the good lion replied.

“We have night lighting here now,” his father said.

“So I see,” the good lion answered like a dutiful son.

“It bothers my eyes a little,” his father confided to him. “Where are you going now, my son?”

“To Harry’s Bar,” the good lion replied. (CSS 483)

この会話から、ヴェニスの町を見た「良い」ライオンがサン・マルコ広場の馬の彫像が「まだ」脚を上げたままであり、鐘楼も「同じ場所」にあると考えている点から、ヴェニスが以前とは変わらず、自分が“very savage”なアフリカを旅したことでいかに変化したかを父親に示そうとしていると考えられる。父親のライオンは、しかしながら、息子の土産話に強い興味を示そうとはせず、ヴェニスの町の変化を示唆する「夜の照明」について語り始める。すると「良い」ライオンは自らの変化をより強く印象付けられる場所を求めて、すぐにハリーズ・バーに向かう。

バーの様子は次のように描写される。“In Cipriani’s nothing was changed. All of his friends were there. But he was a little changed himself from being in Africa” (CSS 484). バーとその客たちはいつもと変わらずそこにいる、と描写され、そのためアフリカ旅行をした「良い」ライオンの変化が対照的に強調されることになる。さらに、バーテンダーのCiprianiが“A Negroni, Signor Barone?” (CSS 484)と尋ねると、ライオンは次のような態度を示す。“But the good lion had flown all the way from Africa and Africa had changed him. ‘Do you have any Hindu trader sandwiches?’ he asked Cipriani” (CSS 484). ライオンが注文する前にカクテルの“Negroni”を飲むかと尋ねるバーテンダーの行動から、それがライオンのお気に入りの飲み物であったことが示されるが、そのカクテルに対して顔をしかめ、“Hindu trader sandwiches”を注文することで、ライオンの変化がさらに印象付けられる。

この場面はアフリカでの場面と対照をなしている。アフリカでは「良い」ライオンは“the blood of the Hindu traders” (CSS 482) を飲むことを拒み、“Negroni” はないかと尋ねることで、自らがいかに洗練された西洋文化を身に着けているかを証明した。一方で、ヴェニスでは“Negroni” を断り“Hindu trader sandwiches” を求めることで、アフリカ旅行を経て自分がいかにエキゾチックで野性的な嗜好を身に着けて帰ってきたかを示そうとしているといえよう。

このヴェニスでの注文で注目すべきは、ライオンが示そうとしている野生が、あくまでも装われたものであることをほめかしている点である。彼が注文したのはアフリカのライオンたちが食べていたような生肉でも生血でもなく、西欧人の好みに合致した“sandwiches” と“martini” である。つまり、アフリカがいかに彼を「変えたのか」を示すための食べ物が、逆に彼の嗜好がいかに西洋文化の枠内に留まっているかを証明してしまうのである。アフリカで「良い」ライオンが求めた“Negroni” や“Americano”, “a glass of pomodoro” といった「飲み物」は彼の西洋文化への心酔ぶりを示すと同時に、彼が人間の血に対して秘かな欲望を抱いていることを示唆するという相反する役割を同時に果たしている。これと呼応するように、ヴェニスで「良い」ライオンが注文する“Hindu trader sandwiches” は、彼がアフリカで身に着けたというエキゾチックな野生を演出する一方、同じ“sandwiches” という「食べ物」と“martini” という「飲み物」が、その野生性はあくまでも西洋的文化の範囲内に限定された一種の仮面でしかないことをほめかすのである。

## 5. 結 論

このように、“The Good Lion” における「食べ物」と「飲み物」はアイロニカルな二面性を持つことがわかる。ライオンの執拗な西洋の食への固執と、アフリカのライオンたちの食生活に対する拒否感は、彼が西洋の文化と倫理観に則した「良い」存在であることを意味すると同時に、西洋文化を優

位と位置づけ、アフリカの文化を無意識のうちに拒否した 1930 年代の Hemingway 作品の主人公たちを暗示する自己批判的なパロディーとして機能する。そして、アフリカにおいて、主人公のライオンが “Negroni” や “Americano” といったカクテルや、イタリア的な “a glass of pomodoro” を求めることは、彼の西洋的「善良」さを表す一方で、皮肉にも彼が Hemingway 作品の他の主人公たちのように西洋的には「悪」とされる欲望を抱いていること、本作では “Negro” や “Americano” のような人間の血を欲している可能性を、その色や名前の中で提示するのである。さらに、ヴェニスでライオンが注文する “Hindu trader sandwiches” は、表面的には彼がアフリカでの旅を通じてエキゾチックな嗜好を身に付け、いかに変化したかを証明する役割を果たしているが、同時にそれが “sandwiches” であり、一緒に注文している飲み物が “martini” であることは、彼が実のところアフリカの文化を吸収したのではなく、その嗜好は西洋的な価値観の内に留まっていることを明らかにしてしまう。

本作は雑誌掲載時は 1 ページ少々しかない小品であり、長らく文学的価値が認められて来なかったが、そこに描かれた「食」は、Hemingway 作品の主要な主人公たちが持つジレンマや内的葛藤を、「良い」ライオンも同様に秘めていることを明らかにする重要な意味合いを持っているのである。一見、寓話という形式ために単純に解釈されがちな「善」と「悪」という区別が、文化的尺度によって一方的に定められた相対的なものであることを、「食」にまつわるライオンの態度がアイロニカルに提示し、従来のアフリカを舞台とした Hemingway 作品の主人公たちを自己批判する側面も含んでいる。このように巧みに配置された「食」の描写に鑑みれば、“The Good Lion” は単なる子供向けの寓話の域を超えた、「とても複雑な」Hemingway 作品の縮図といえるのではないだろうか。

※本稿は 2014 年 6 月 27 日に The Hemingway Society Venice Conference (Venice International University) で行った口頭発表に加筆、修正を施したものである。

註

<sup>1</sup> Adriana のイラスト付きで 1951 年に *Holiday* 誌 3 月号に掲載された “The Good Lion” と “The Faithful Bull”。(*Holiday* 50–51)



<sup>2</sup> 1951 年 3 月発行 *Holiday* 誌に掲載されたウィスキーと自動車の広告。  
(*Holiday* 13, 21)



<sup>3</sup> 拙論において、*A Farewell to Arms* に描かれた登場人物の「手」の色や形、動き方にまつわる描写が、主人公 **Frederic** が隠蔽する **Rinaldi** への同性愛への関心や、戦争と死への恐怖をどのように暴くのかを考察した。さらに、**Catherine** が差し伸べる「手」を拒絶する **Frederic** の仕草が、彼女との恋愛を隠れ蓑とし、同性愛や戦争、死から逃れようとした **Frederic** の秘められた意図を暴露することを論じた(勝井 92–107)。

### Works Cited and Consulted

- Cipriani, Arrigo. *Harry's Bar: The Life and Times of the Legendary Venice Landmark*. 1996. New York: Arcade Press, 2011.
- Boreth, Craig. *The Hemingway Cookbook*. Chicago: Chicago Review Press, 1998.
- Hemingway, Ernest. *The Complete Short Stories of Ernest Hemingway*. New York: Scribner, 2003.
- . *A Farewell to Arms*. 1929. New York: Scribner, 2003.
- . *For Whom the Bell Tolls*. 1940. New York: Scribner, 2003.
- . *The Garden of Eden*. 1986. New York: Scribner, 1995.
- . *Green Hills of Africa*. 1935. New York: Scribner, 1998.
- . *The Sun Also Rises*. 1926. New York: Scribner, 1970.
- Holiday* 9 (March 1951).
- Hotchner, A. E. *Papa Hemingway: A Personal Memoir*, 1955. Cambridge: Da Capo Press, 2005
- Johnston, Kenneth G. "The Bull and the Lion: Hemingway's Fables for Critics" *Fitzgerald/Hemingway Annual* (1977) : 149–56.
- Smith, Paul. *A Reader's Guide to the Short Stories of Ernest Hemingway*. Boston: G. K. Hall, 1989.
- Underhill, Linda and Jeanne Nakjavani. "Food for Fiction: Lessons from Ernest Hemingway's Writing" *Journal of American Culture* 15 (1992) : 87–90.
- Widmayer, Jayne A. "Hemingway's Hemingway Parodies: The Hypocritical Griffon and the Dumb Ox" *Studies in Short Fiction* 18 (1981) : 433–38.
- 勝井慧「暴露する手—*A Farewell to Arms* における逃避と露見」『アーネスト・ヘミングウェイ：21世紀から読む作家の地平』日本ヘミングウェイ協会編，臨川書店，2011年：92–107頁。
- サヴァラン・ブリア。『美味礼賛』。関根秀雄訳，白水社，1996年。
- 澤井慶明・永田奈奈恵。『カクテルの事典』，成美堂出版，1996年。